

富山県俳句連盟会報

第 86 号
 富山県俳句連盟
 平成三十年七月一日発行
 富山市安住町二一四
 〒930 0094 電話 〇七五四三六四〇
 振替番号 金沢 五一一七二〇八
 北日本新聞社編集局内

平成三十年度 総会及び俳句大会 田島 和生先生の講演を聴く

平成三十年度総会及び俳句大会は、好天の六月二日(土)午後一時より北日本新聞ホールに於いて百五十名の参加を得、開催された。坂田直彦幹事司会のもと、中坪達哉会長は挨拶で秋、黒部市で行われる「ねんりんピック、富山2018俳句交流大会」への参加を呼び掛けた。



(挨拶の中坪達哉会長)

総会の議長に新保吉章理事を選出し、浅野義信事務局長が平成二十九年度の事業報告、収支決算報告を行い、大久保置活監事が監査結果を報告し、これらを承認。さらに平成三十年度事業計画案、収支予算案を提案し、原案通り拍手で承認された。又、会員増を目指すため、規約4条の改正を提案し

それも承認。その後、田中徳子、島倉春美、西田真理子各理事の退任に伴い、西野睦子を幹事に、真野賢幹事を理事に就任することを会長より提案され、承認され、全ての議案は可決し、総会は滞りなく終了する。

続いて「雉」主宰、田島和生先生の記念講演に移る。演題は「澤木欣一・細見綾子夫妻の青春俳句」。レジメをもとに、年齢に拘らず青春性を大切にして欲しいと纏められた。(講演要旨は別掲)

小憩後の俳句大会に移り、すでに出句されていた七〇四句(三五二名)について、講師及び連盟役員によって選考された特選句並びに入賞句を田村京子、中島廣志両幹事が披講し、表彰式に移る。

まず講師の田島和生先生より丁寧なる講評を戴く。続いて寺田幹北日本新聞社文化部長から北日本新聞社賞、又、中坪達哉会長から連盟賞をそれぞれに贈呈された。(成績は別掲)

但田長穂副会長が閉会の辞を述べ、総会、俳句大会は盛会裡に終了した。

合同句集(第四十三集) 原稿募集

句集を次のとおり刊行いたします。同封の原稿用紙により全員ござってご応募ください。

- 作品数 十五句(平成二十九年七月から平成三十年八月までの自選句)
- 記載要領 所定の原稿用紙に姓号、(ふりがな)作品(春夏秋冬の順が望ましい)、本姓名、生年月日、郵便番号、住所、電話番号、所属結社または句会名を記載する。希望者は住所等の未掲載も可。
- 締切 七月二十八日 必着厳守。
- 出句料 三千元(一冊進呈) 同封の振替用紙で原稿発送と同時に郵便局へ払い込むこと。
- 送付先 〒九三五一〇〇〇五 水見市栄町一〇一六 坂田直彦 方
- 刊行予定 十月

富山県芸術祭主催
 富山県民芸術文化祭参加
 富山県俳句連盟秋季俳句大会(予告)
 講師 富山大学教授
 中島 淑 先生
 日時 十月六日(土)午後一時
 会場 北日本新聞ホール
 ※第一回越中讃歌募集句のテーマは衣類

春季俳句大会作品抄

田島和生先生 特選句

手に履きて選ぶ塗下駄春の雪
立山の眩しさに解く雪囲
森 純子
走りたくてならぬ子に風光りけり
久崎富美子
掬ひたる水のきらめき初つばめ
海野ふさ子
ドロップ缶振るや飛び出す春の色
浅尾 京子

連盟選者特選句

義 信選 雛の灯をともし仏の灯をともし 村山 志水
順 子選 ぞんぶんに遅日の鎌を使ひけり 石田 英子
冬 青選 風少し耳に遊ばせ春隣 高木 昭夫
英 子選 春田打つここに何から植えようか 中 静子
玲 子選 夕桜ゆれ合いながらかがり火に 狩谷 笑子
康 裕選 雛の目に昭和の月日ありにけり 松波 絹枝
置 箔選 子の話介護の話花筵 野村美智子
こつき選 種を蒔くこの一粒にある命 成瀬 輝代
久 惠選 冬タイヤ外すや海を見たくなり 宇波可津志
城 子選 牛舎うら寝葉にまじる残り雪 石田 英子
ゆづ子選 生かされて生きて今年も桜かな 今井 淳良
弥 生選 雛の夜の夢に姑来て母も来て 室井千鶴子
富美子選 慎重に受験の朝の目玉焼き 田中 憲子
美智子選 退院の空の青さを鯉鱗 荒田眞智子
洋 子選 青空にさく裂したる花辛夷 荒木かつを
直 彦選 一粒ずつ曾孫のくれし雛あられ 谷 雅夫
重 之選 紙袋振りて覚まして種を蒔く 平譚 敏子
一 子選 山笑ふあの時君は若かつた 今井 淳良
吉 章選 鳥雲に息子の涙見てしまふ 金山美恵子
桂 子選 何んにでも話しかけたき春めく日 丸田美恵子
恵 子選 歩かねど母ももとの春の靴 角田 睦子
圭 二選 地虫出づ少しは違ふ世を求め 町田 忠治
昭 夫選 海の町海より覚めて夏燕 中島 黎子

◇入賞句

眞知子選 春泥と戦つてゐる三輪車 久崎富美子
寿 山選 納棺や姉に持たせる遍路杖 八田千恵子
長 穂選 太陽の塔の顔いま花粉症 石灰 潤子
京 子選 大根抜く地球に一つ穴を開け 河内ゆう子
三 久選 手に履きて選ぶ塗下駄春の雪 森 純子
達 哉選 走りたくてならぬ子に風光りけり 久崎富美子
三津夫選 春雪のあそび心の降つてくる 若土 白羊
廣 志選 耕せば大地斜めに山の畠 大塚 喜子
美知子選 鞆浸す桶に宿借る春の月 大澤美枝子
多佳子選 今生のひかり差し入る涅槃絵図 池田フサ子
栄 子選 身こもれる子に傾けし春日傘 森 純子
幸 子選 春光や大雪嶺の盛り上る 四宮 一子
賢 選 のどけしや父の遺せし鎌ふたつ 泉 幸子
千鶴子選 鐘の音海へ出てゆく桜かな 石工 冬青
純 子選 露味噌のほろ苦し来し方もまた 内橋はるみ
稔 選 山姥のあそびし村の雪濁り 平野ともみ
とる選 直会に神も微酔ふ春の宮 西村 久栄
白 羊選 稚魚放流春の光となりにけり 吉崎 陽子
天位⑨ 海を見て来て残雪の劔岳 室井千鶴子
地位⑦ 走りたくてならぬ子に風光りけり 久崎富美子
人位⑦ 立山の眩しさに解く雪囲 板谷野々江
4位⑦ 海の町海より覚めて夏燕 中島 黎子
⑦ 猫に顔側がれ縁側あたたかし 青木 恭子
⑦ 掬ひたる水のきらめき初つばめ 海野ふさ子
⑦ 能登島は海より暮れて紅椿 野中多佳子
⑦ 待望の移動スパー村の春 林 紀男
⑦ 子の話介護の話花筵 野村美智子
5位⑥ 耳遠き母へゆっくり初電話 村田さちよ
⑥ 雛の灯をともし仏の灯をともし 村山 志水
⑥ 紙風船撞いてもついても母遠し 飛田雪貌子
⑥ 歩かねど母ももとの春の靴 角田 睦子
⑥ ためらはずうたがはず落つ椿かな 能登 恭子
⑥ 太陽の塔の顔いま花粉症 石灰 潤子

5位⑥ 兄弟の靴新しく進級す 鳥倉 千春
⑥ 残雪を掻きて寛を正しけり 酒井千枝子
6位⑤ 会釈して思ひ出せざる臙かな 有澤 嘉晃
⑤ 大根に花咲き後期高齢者 柄沢 恭子
⑤ 身こもれる子に傾けし春日傘 森 純子
⑤ 雛の目に昭和の月日ありにけり 松波 絹枝
⑤ 鞆浸す桶に宿借る春の月 大澤美枝子
⑤ お似合いですその一言で買う春着 上田 森子
⑤ 納棺や姉に持たせる遍路杖 八田千恵子
⑤ ふいに来るおさな眠り桜餅 久保 俊一
⑤ 古里の噂も添へて草の餅 河内ゆう子
⑤ 乳のみ児の名を尋ねれば山笑ふ 田中 律子
⑤ 花びらを付けて新車の届きけり 二俣れい子
⑤ 慎重に受験の朝の目玉焼き 田中 憲子
⑤ 水底に影を曳きゆく花筏 清田 圭一
⑤ 門前にいまも駄菓子屋暮遅し 石田阿畏子
⑤ 真つ先に花びらねまる花筵 川井 城子
⑤ 今生のひかり差し入る涅槃絵図 池田フサ子

富山県現代俳句協会

秋季吟行俳句大会(予告)

日時 九月二日(日)午前十時受付
会場 高岡市生涯学習センター150三号室
高岡市末広町一の七 ウィングウイング高岡内
投句締切 十一時半
吟行地 古城公園、高岡大仏、山町筋など
参加費 千円

俳人協会富山県支部 俳句大会(予告)

協会員以外の方のご参加も歓迎いたします。
日時 九月二十三日(日・秋分の日)
会場 富山電気ビル 午後一時
講師 「群青」代表 権 未知子 先生

講演要旨



澤木欣一・細見綾子夫妻の青春時代

「雉」主宰 田島和生



現代俳人として名を挙げた澤木欣一、細見綾子夫妻はどんな青春時代を送り、どんな俳句を作ったのだろうか。日中、太平洋戦争の暗い時代、二人の俳句を通じてそれぞれの思いに迫ってみたい。

細見綾子は明治四十年、兵庫県水上郡芦田村東芦田（現、丹波市）生まれ。父は奈良師卒。芦田村長も務めるが、綾子が十三歳のとき病死。綾子は日本女子大

国文科卒業後、太田庄一（東大医学部助手）と結婚するが、夫は二年後に病死。同じ年に母も病死。本人も肋膜炎にかかり、丹波の自宅で一人療養生活を送る。

昭和四年、二十二歳の時、主治医の勧めで俳句を始める。大阪朝日新聞の「朝日俳壇」選者だった松瀬青々主宰「倦鳥」に投句する。翌年（来てみれば）くちらして猫柳の句が初入選。体調が良ければ、家の周辺を歩いて句作に励んだ。

（そら豆はまことに青き味したり）へうすものを着て雲の行くたのしさよへで虫が桑で吹かるる秋の風は当時の作

品である。

昭和九年、丹波の自宅から大阪府池田市に転地療養する。師の松瀬青々は大阪にいたため、「倦鳥句会」にも出席するのちに「運河」を創刊主宰する右城臺石とも親しく交わる。

青々は、最初の妻が病死し長く娘と暮らしていたが、娘が結婚したのを機に再婚。相手は綾子の兵庫県立柏原高校時代の同級生。青々は六十一歳、新夫人は二十四歳。三十七歳も年下の若妻だったが、青々を父と思つてよく尽くしたという。

昭和十二年、青々が亡くなり、綾子は自ら句作に打ち込むことになる。△元日の屋過ぎにうらさびしけれ（ひし餅のひし形は誰が思ひなる）ヘチュリップ喜びだけを持つてゐる（ふだん着でふだんの心桃の花）つばめ／＼泥が好きな燕かな

昭和十七年、第一句集『桃は八重』を出版、俳壇で高く評価される。作者に一度会つてみたいと、東京帝大一年の澤木

欣一は四高時代の友人の京都帝大生二人と訪問する。これが運命の出会いとなる。

綾子は欣一より一回り年上で、奈良の寺や伊勢神宮を案内する。しかし、昭和十六年十二月、太平洋戦争が勃発、日本の敗色が濃くなり、十八年、学徒動員で、欣一も出征する。千葉で、加藤楸邨主宰の「寒雷」が欣一らの送別会を催す。綾子も欣一のために出席する。断層に秋風がしむ別れかな

欣一は奇跡的に復員し、二人は二十二年十一月、結婚。綾子は四十三歳の高齢ながら男児を授かる。鶏頭を三尺離れもの思ふ（白木權嬰兒も空を見ることあり）。その後、句集『冬薔薇』で茅舎賞。句集『伎藝天』で芸術選奨文部大臣賞。句集『宴奈羅』で蛇笏賞。平成九年九月六日、心不全で死去。享年九十。

一方、欣一は大正八年、富山市梅沢町生まれ。両親共に教職。父が朝鮮京城（ソウル）に赴任したため、小中学は朝鮮で、同級生に原子公平（俳人）がいた。俳句は金沢の第四高等学校（四高）時代から始め、「馬酔木」「鶴」などさまざまな俳誌に投句する。「馬酔木」初入選は二十歳の時で（雪晴れに足袋干すひとり静かなる）。このほか（へしぐるるや窓を掠むる鳥つぶて）（巨き雪遺骸を櫓に載せゆけり）（馬酔木）山口誓子連作欄、五句）今子を征かしめ遙けく見やる雪の嶺（天香）石橋辰之助選

やがて、加藤楸邨の句に惹かれ「寒雷」に絞る。初入選は（はらからの蚊帳に眠るや遺影の間。四高卒業時に（雪しろの溢るゝごとく去りにけり）と金沢の犀川を詠む。昭和十七年、東京帝大国文学科入学。夏休みに楸邨に同行し新潟・佐渡などを歩き「北陸紀行」（四三句）を「寒雷」に掲載。天の川柱のごとく見て眠る）はその一句。しかし、太平洋戦争で学生も応召。（柿実る幹黒き辺にまた逢はめ）（金子兜太出征。自分も大学二年の時、召集令状が届き、綾子とも別れる。秋山の驛を見てゐる別れかな）

満州の第九師団山砲連隊内務班に所属。古参兵に連日殴られ、自立神経失調症などで入院。病床に原子公平、綾子に編集してもらった第一句集『雪日』が届く。敗戦で九月に帰還し、丹波に綾子を訪ねる。南天の実に惨たりし日を思ふ

戦後二十一年、金沢で「風」創刊。昭和三十年前後、金子兜太らと社会性俳句運動を起こす。代表句は（塩田に百日日目つけ通し）。また同じ年、五十四歳の綾子をテーマに（わが妻に永き青春桜餅）と詠み、自註に「多少甘いかな」。金沢大助教授をへて文部省教科書調査官。東京藝大教授。俳人協会会長二期。句集『眼前』で詩歌文学館賞。自伝『昭和俳句の青春』で俳人協会評論賞。句集『白鳥』で蛇笏賞。平成十三年十一月五日、肺炎で死去。享年八十二。

平成 29 年度 収支決算報告

(単位:円)

Table with 10 columns: 科目, 予算額(A), 決算額(B), 差(B-A), 備考, 科目, 予算額(A), 決算額(B), 差(B-A), 備考. Rows include 会費, 過年度分会費, 助成金, 寄附金, 合同句集代金, 雑収入, 繰越金, 合計.

(収支差額 306,704 円は平成30年度へ繰越)

平成 30 年度 収支予算

(単位:円)

Table with 10 columns: 科目, 予算額(A), 前年度予算額(B), 差(A-B), 備考, 科目, 予算額(A), 前年度予算額(B), 差(A-B), 備考. Rows include 会費, 過年度分会費, 助成金, 寄附金, 合同句集代金, 雑収入, 繰越金, 合計.

受賞

第三十六回とやま文学賞 佳作

谷 雅夫

消息

○富山県現代俳句協会は平成三十年年度総会、及び俳句大会を三月二十五日(日) 県教育文化会館にて開催。

天位 梅咲いて兜太の庭の鯨が消ゆ 平野ともみ

地位 大水柱ぼきりと折れて兜太逝く 今村 暢子

人位 耕しの目安は「夫の農日記」 丸田美恵子

役員改選に当たり新役員決定 会長 森野 稔

副会長 森川 敬三、坂田 紀枝

事務局長 高木 昭夫 顧問 坂田 直彦、白井 重之

○「辛夷」通巻千百号 大正十三年一月号創刊以来、本年の六月号を以って「辛夷」通巻千百号を迎えた。誌齢は全国で十番目

句集出版紹介

富山俳句4句会、合同句集「めぐりあひ」

若土白羊「越中おわら節」 平 29・12

西田信義「日溜り」 平 30・2

海程富山「鮮」20号 平 30・3

みのり俳句会合同句集第12号 平 30・3

奥の細道サミット高岡実行委「高岡集」 平 30・3

城端俳句協会誌第二十四号 平 30・3

北日本新聞さわやか俳句教室「五彩」 平 30・4

ねりんピック富山2018 俳句交流大会

日時 十一月四日(日) 会場 黒部市宇奈月国際会館(セレネ) 黒部市宇奈月温泉六番地三 TEL 〇七六五(六)二〇〇〇

吟行地 温泉街、宇奈月ダム、松桜閣 尾の沼体験交流施設とちの湯

受付 九時より締切十一時半 投句数 二句

記念講 講師 宮坂 静生 先生 当日目選者 坊城俊樹、駒形隼男、鈴木

しどみ、高野ムツオ、伊藤政美、清水道後、西山睦、佐渡賀直美、遠藤

若狭男、他、県俳句連盟役員 選挙特選賞ほか優れた作品に正賞、準賞有り

主催 厚生労働省富山県黒部市ほか ※当連盟夏季吟行会は本大会に振替

ます。大勢の御参加お願いします。

第37回 とやま文学賞 作品集

俳句 未発表句 二十句 (B4四百字詰原稿用紙を使用) 締切 平成三十年九月末日

送り先 〒930-0006 富山市舟橋北町七一 (社)富山県芸術文化協会事務局 (とやま文学賞)係宛

編集後記

連盟会報86号をここにお届け致します。次回87号は平成三十年十二月一日発行予定です。会報に関する記事等があれば、原稿用紙記入の上、左記に送付下さい。(郵送又はFAXのみ) 〒939-1811 南砺市理休二二六 FAX:TEL 〇七五 六二二三〇八

川井 城子